

自由論題1、報告3
<p>報告テーマ</p> <p style="text-align: center;">カンボジアで高まる中国の存在感 “China’s growing presence in Cambodia”</p>
<p>氏名(所属)</p> <p style="text-align: right;">酒向 浩二(みずほ総合研究所) SAKO Koji (Mizuho Research Institute)</p>
<p>要旨(800字程度)</p> <p>ASEAN 諸国において、近年、中国寄りの姿勢が目立つ国としてカンボジアが挙げられよう。その姿勢が、国際社会から注目されるようになったのは、2012年に南シナ海問題で、中国とベトナム・フィリピンが反発する中、同年のASEAN議長国であったカンボジアが中国寄りの姿勢を崩さず、ASEAN外相会議や首脳会議において、海洋権益に係るASEAN全体の合意文書をまとめることができなかつた際であった。以降、カンボジアは、ASEAN随一の親中国として、世界から注目されるようになっていゝる。</p> <p>カンボジアは、先進国からODAを受けている立場の国であり、内政混乱を経て1990年代に国連の監視下で総選挙が実施されて以降、日本は長らく援助を行ってきた。同国の500リエル紙幣の裏側に日の丸と通称「きずな橋」と「つばさ橋」が描かれていることは、日本への謝意の証左であり、親日的なお国柄は、現在も維持されているといえよう。国際社会に開かれた政権運営が望ましいように思われる。</p> <p>それではなぜ、近年、中国傾斜が顕著になっているのか、そのことはカンボジアに投資済の日本企業にどのような影響を及ぼしているのか、同国最大の港湾都市であるシアヌークビルでは、中国資本による経済特区や都市開発が進んでいるが、その実情はどのようなものなのかを改めて深耕する必要がある。</p> <p>そこで筆者は、2019年12月に、カンボジアのシアヌークビルとプノンペンの現地調査を行った。カンボジアのフン・セン政権と中国の30年の関係を振り返りながら、カンボジアと中国の2国間関係を整理し、どのような中国側の政策要因でこれらの事象が進み、カンボジア側は完全にコミットしているのか、それとも懸念があるのかを明らかにすることを試みた。</p> <p>カンボジアの行動原理の背景を理解することは、日本の政界、経済界のみならず、学术界にとつても、関心の高い事項であると考えられ、今般、発表の機会を頂戴できれば幸いである。</p>